

bzan chos kyi reyal mtshan の自伝にもこれに相應する記述は一語も含まれていない。

gTsañ の一部はもとめて bkra gis luh po の莊園であつたが、Pan chen bla ma をして分掌せしめたのは、十八世紀に入つてからの清朝の政策で、Pan chen bla ma II blo bzai ye ges のときに始る。

第一世の名は、ロサン・チエジエではなく、ロサン・チエキ・ゲンツェンでなくてはならぬ。ダライ・ラマ五世の歿年は一六八二年であつて一六七七年（一五二）ではない。ジュンガリヤの dgah idan Bogoshtu hañ が sde srid Sais reyas reya mtsho (チセとは宰相のことである。従つて、宰相チセ・サンゲ・ギヤムツォー六四頁—とは云わぬ) と同盟した。然し、「青海ホシヨット部を襲つて大敗させ、チベットからホシヨット部の勢力を一掃した。」とあるが、右に相當する事實は全然ない。

チベットからホシヨットの勢力が一掃された(?) のは、ずつと後のことで、勿論、sde srid (第巴) も dgah idan (噶爾旦) も死んだ後の一七二八年に當る。この時、dgah idan の甥 Tshe dban rab btran がホシヨットの lha bzai khan を殺した。いずれも、先に示し、又長沢氏が参考文献としてゐる Petech 教授の名著にくわしく述べられてゐる。

以上は本書の前半に見られた誤である。

初めにも述べた通り、この書物は、もう一步の努力と慎重さが加わつていたら、「第三の眼」が荒唐無稽なものであることに端を発して斯学に資する入門書を書こうとした著者の意図も或は、達せられたのではないかと思われるが、右のように、可成り大事な点で難が多い。然し、一応古代から現代に至る歴史、其の他チベットに関する大概のことがらについての記述が含まれているので便利である。

(校倉書房刊、昭和三十九年九月、三一〇頁)

北京大学中国語言文学系語言研究室編

漢語方言詞匯

藤堂明保

一、語イの対照表

一九六二年に『漢語方言字、滙』(文字改革出版社)が出版されたが、それはおもな親字の各方言における発音を示したもので、いわば、カールグレン氏の方言字イの現代版であつた。ところが、こんど出版されたこの書は、全く前者と性質が異なつてゐる。その書名の示すとおり、これは各方言にお

いて、ある意味を表わす最も常用のことばを調査したもので、いわゆる方言語イの対照表なのである。

二、内容

調査の拠点はつぎの18所で、全国の七大方言区を代表する所が選ばれている。

官話——北京・濟南・沈陽（以上北方官話）

西安（西北官話）・成都・昆明（以上西南官話）

合肥・揚州（江淮官話）

吳方言——蘇州（北区）・温州（南区）

湘方言——長沙

江西方言——南昌

客方言——梅縣

粵方言——広州・陽江

閩方言——廈門・潮州・福州

収録された語イは九〇五項目で、いちおう比定される漢字を示したうえで、国際音標記号でもつて各方言の発音を示している。名詞（天文地理以下の細目に分類）——動詞（五官の動作以下の細目に分類）——形容詞（形状以下の細目に分類）——代詞——量詞——副詞——介詞連詞の順序に配列される。声調は五線記号で示されているが、地方方言でしばしば見られる「変調」を記録するに苦心した跡が見える。

三、語イの分布

もう五、六年も前のことだが、服部四郎氏を中心として、常用二千語の調査を各言語別に行なつたことがあつた。そのとき私も中国語学の畑では、北京・蘇州・広州・廈門の四方言の調査を行なつたにすぎないが、最も困つたのは、似た意味の語イがいくつも共存する場合に、どれを選ぶかということ、また引く——引つばる——引きずる……のような意義素の違い、あつて——つめたいのような語の意味の核心を、どう判定するかという点であつた。こんどの18方言の調査にさいしても、同じような問題が続出したにちがいない。その一端は序文に示されているが、たとえば複数の類義語イが共存するときには、(一)まず書面語的なものはなるべく排除し、(二)口頭語のうち、常用度の高いものから順番に並列したそうである。意義素の決定はむずかしい問題だが、なにぶん中国人が母語について調査したのだから、私どもが調査した場合に比して、内証は得やすかつたにちがいない。

さて、この書を見ると、語イの「いのち」というものは千差万別の相があることがわかる。動詞の死・笑のように古今東西に敵として生きぬいているもの、紙・石頭・鯉魚といった名詞のように、18方言に共通のものがある反面、たとえば太陽のこと・夜のこと・朝のこと・泳ぐこと……などは、方言差がきわめて大きい。猫は18方言共通なのにネズミとなると千差万別なのである。どのページを開いてみても、何かしら

話かけてくる語イの歴史性と特殊性とがにじんでいる。

つぎに、知道（北京・濟南・沈陽・西安）—曉得（成都・昆明・合肥・揚州・蘇州・温州・長沙・南昌）というように、語イの南北分布のひじうによくわかる例が含まれている。もちろん、それとても語イの性質によつていちじるしい出入があるわけだが、こういう頻出する語イについて、ある程度の分布圏がわかつていると、文学や歴史の作品の「地方性」を計る尺度として、役立つ場合が少なくないだろう。とにかく楽しい書物である。そして利用する途は他にまだまだありそうである。

（北京文字改革出版社、一九六四年五月、B5 四六〇頁）

論 說

前 号（第四十七卷）
第四十四号 目 次

初期アルメニア史書に見えるエフタルとクシヤン

榎 一 雄

中国における農具の発達—劉仙洲『中国古代農業機械発
明史』を読んで—

天 野 元之助

批評と紹介

中国共産党史研究文献ノート（下）

藤 田 正 典

楊聯陞著 シナ帝国における公共事業の経済的諸相

斯 波 義 信

上山大峻著 曇曠と敦煌の仏教学

山 口 瑞 鳳

田村実造著 中国征服王朝研究 上

村 上 正 二

クラマビング編 マカートニー使節訪中日誌

佐々木 正 哉